

「天災は忘れない前にいつでもやってくる」

東京都 八王子市立松木中学校 3年 <sup>くすだ</sup>楠田 <sup>はるき</sup>遙希

日本の国土は約7割を急な地形が占め、地盤も弱く、さらに地球温暖化によって、大雨や台風が増加傾向にあり、それらによって土砂災害が増加している。土石流やがけ崩れなどの土砂災害は、発生すれば多くの人命を一瞬で奪い、大きな被害をもたらすことになる。

国土交通省によると、令和3年度は約1,000件の土砂災害があり、いつでもどこでも発生してもおかしくない状況にある。

土砂災害は家の近くでも発生し、身近な災害となりつつある。

平成29年の台風第21号による大雨のとき、家の近くの斜面を水が滝のように流れていた。翌日、その場所を見ると斜面が崩れていて、歩道と車道の一部が土砂で埋まり、新聞にも掲載されていた。幸いなことに、怪我人などはいなかった。

すぐに、車道の土砂は除去されて、車は通行できるようになったが、歩道は土砂で埋まったままで、斜面には水が浸みこまないように青色のシートで覆われていた。

その後、斜面の工事を開始する前の安全対策として、再び斜面が崩れても道路に影響がないように鉄の柱と板で作られた頑丈な防護柵を設置していた。次に、崩れて緩んだ斜面の土砂を撤去して、金網で作られた直方体の箱の中に岩が入った物で、斜面を覆うように設置していた。

半年後、斜面の補強工事が完了し防護柵が撤去され、道路を安全に通行できるようになった。工事完成後の斜面は、岩と金網の色でグレーであったが、今では岩の間に草が生え、緑で覆われているため、土砂災害が発生した場所とは想像できない状態となっている。

近所での土砂災害については忘れていたが、市役所に行く機会があり、待ち時間にお知らせコーナーにある大きなファイルがあったので、内容を確認すると航空写真の上に黄色や赤色などの線が引かれていた。自宅のあるページを探すと、斜面が崩れ土砂災害があった場所が、黄色の線で囲われていた。表紙には、土砂災害(特別)警戒区域公示図書と書いてあった。土砂災害は、発生する場所を正確に予測することが困難であると思っていたが、発生する可能性のある場所を知らせてくれる資料があることに驚いた。

改めて、土砂災害(特別)警戒区域についてネットで調べると市のハザードマップなどに掲載しており、簡単に検索することができた。

ハザードマップには、土砂災害(特別)警戒区域に加えて、洪水時に想定される浸水深さ、指定緊急避難場所や病院などの災害時の行動や事前の備えに必要な様々な情報を掲載してあった。

ハザードマップについては、ネットに掲載することは良いことであるが、防災意識を持った人でなければこのような防災情報に触れることはない。

土砂災害等による被害を減らすには、住民が自ら災害に対する備えを行うことが大切である。

そのため、ハザードマップを活用した防災の講習会や避難訓練等を実施して、災害時の行動に慣れていくことが重要である。さらに、訓練において課題がでてくれば、修正し、もっと良い対応を常に考えていくことも重要である。

しかし、起こるか起こらないか分からないもののために、わざわざ避難する必要があるのかと思う人もいる。そのような人のためには、警報や避難の通知だけでは行動に移さないため、視覚的に危険性を伝える必要があり、リアルタイムの降雨量を用いて、斜面の崩壊の危険性を航空写真の地図上に示したデータをネットに公開することで、少しでも被災者を減らすことが可能である。

「天災は忘れた頃にやってくる。」という有名な言葉があるが、現在では、日本のどこかでいつも災害が発生し、「天災は忘れない前にいつでもやってくる。」という状態になってきている。

そのため、これからは、土砂災害に限らず色々な災害の危険性を把握して、事前の準備を常に実施していきたい。